

パレスチナのオリーブは語る

主よ、平和をわたしたちにお授けください。
 わたしたちのすべての業を成し遂げてくださるのはあなたです。
 イザヤ書 26章 12節

木が話している声を聞いたことがありますか。木は何も話しません。でも木が話すことができれば、どんな話をしてくれるでしょうか。被爆地ヒロシマで、木の語る「ことば」を聞きたいと計画した人たちがいます。

1945年8月6日8時15分。世界最初の原子爆弾が広島に投下されました。おなじ頃、パレスチナの涸いた大地に、一粒のオリーブの実が落ちました。芽を出して成長し、平和な時には人々が木陰で休み、豊かな実ができました。ところが、オリーブの木のまわりではたえず紛争がおこりました。

あれから65年。原爆のあと焼け野が原だった広島には、世界中から6000本の木が届けられ、緑豊かな森の平和都市となりました。ところが、パレスチナで育ったオリーブの木は、人間が起こした争いのため多くの木が倒されています。

紛争の地パレスチナでは、オリーブを「命の木」と呼びます。イスラエルにとっても大切な木です。平和のシンボルです。人々はその木を大切に、木と共に生きてきました。

オリーブは、そこで何が起きているかを見てきました。その木が紛争によって倒されています。人と人を分けるために高さ8mの分離壁（写真右）建設するため。住むところの奪い合いから道路の建設をするため。人間の勝手な思いや争いによってオリーブが倒されているのです。

オリーブの木は何も話しません。でも話すことができたら何を伝えたいでしょうか。平和都市になった広島に住む人たちが、紛争によって倒された「命の木・オリーブ」をヒロシマに運び、その木で木簡を並べた「パンの笛（パンフルート）」という楽器をつくる計画を立てまし

た。パレスチナのルーテル教会にお願いし、倒されたオリーブを探してもらいました。届けられたオリーブの年齢は60歳位、イエスさまが過ごされたパレスチナ居住区ナザレ近郊の村で倒された木でした。パレスチナの人々の祈りによってヒロシマに届けられた時、木の中心には水分があり生きていました。そのオリーブの木が、「パンの笛（パンフルート）」となって再び命をあたえられ復活したのです。（写真左下）

オリーブはパンの笛になって語り出しました。「『なぜ人は戦争をし、人殺しを繰り返すのだろう。』僕はパレスチナの風に吹かれながら思っていた。街は破壊され、僕の命は分離壁のため倒された。でも僕はヒロシマの街を知っている。原爆で破壊されたヒロシマは、平和都市として再建した。そして僕もヒロシマで再び命を与えられた。だから

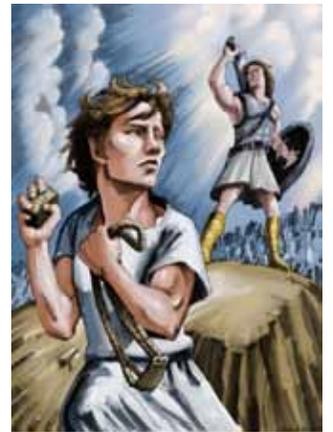
らヒロシマの子どもたちに語りたい。紛争の中にいる子どもたちにとって、あなたたちは「希望」だと・・・。」

紛争によって倒されたオリーブの木は、ヒロシマの風を受け語り始めました。

Y.T.

（詳しくは「ほほ笑みと感謝の会」ホームページ <http://asmile.jp/> で）





「ここは冷静になって…」と

旧約聖書の中で一番人気のある王様はダビデです。最も尊敬されている王様です。人間的な間違いも多くしましたが、ダビデは最後までたった一人の神様に従いました。この場面は有名な「ダビデと巨人ゴリアト」の一騎打です。戦いの時、ペリシテの巨人ゴリアトの強大な武力と脅威を見せられますが、ダビデという羊飼いの少年の信仰と勇気によって戦いに勝利するという物語です。しかも「石ころ」で。

ただ、物語をよく読んでみると、決して戦いが賞賛されているわけではなく、「主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされない」ということが語られています。

ダビデと巨人ゴリアトの違いははっきりしています。ゴリアトは鎧、兜を身につけた重装備、完全武装の戦士。ダビデは「主の守り」と「石ころ」を持っていた羊飼いの少年。ダビデは神様を持っていたのです。

私たちは、武器で身を守るのではなく、信仰で神様に守っていただきます。「ここは冷静になって」一番の武器は何かを考えてみましょう。

いのちのはぐくむ

中井弘和

第17回 「青い空」

『主はその聖所、
高い天から見渡し
大空から地上に目を注ぎ
捕らわれ人の呻きに耳を傾け
死に定められていた人々を
解き放つてくださいました。』
(詩編102章20～21節)

私は、黄金色の稲穂の田んぼに抱かれるように伏しながら、高く澄み渡る青い空を見上げて



いました。すると、遙か空の淵から私を呼ぶかすかな声が聞こえてきます。その声は徐々に明瞭になり、気がつくや医師たちが私の顔を覗き込んで、手術が終わったことに加え、人工肛門にはならなかったことを告げていました。昨年4月、腸重積症という病気に罹り緊急に手術を受けた時のことです。重篤な病状から人工肛門になるのは避けられないと手術前に言われていました。しかし、手術中、自らの腸に陥入していた腸の部分がひとりでに抜け出てくるという幸運によって大事には至らなかつたのです。変わらず稲の仕事を続けることができます。八月が来ると、決まって蘇ってくる青い空の記憶もあります。終戦を告げる玉音放送を大人たちに交じって聞いたのは小学校に入る前の年でした。雑音ばかりでよく聴き取れませんでした。その場の沈痛な雰囲気から日本が負けたことを幼心に悟りました。逃れるように外に出て、見上げた空は真つ青に広がり輝いていました。その瞬間私の小さな胸に淀んでいた不安は消え去りました。たまたま近くにいた人の「もうこれで空襲はなくなる」と呟いていた安堵の声とともに、その時の青い空

が思い出されます。大学を定年になった年、永く気にかかりながら読めずにいたトルストイの『戦争と平和』を読みました。主人公、アンドレイが戦場で銃弾を受けて仰向けに大地に倒れ、瀕死の状態で見えた青い空の場面がとても印象に残りました。敵の將軍、ナポレオンが、大勝利となった戦場の巡視に来て、傲然と彼の傍らに立ちふさがります。その時、彼は、高い永遠の空を垣間見ながら、敵ではあっても軍人として崇拜していたはずのナポレオンが実に小さくちっぽけな人間と感ずるのです。アンドレイの魂は無限の空と繋がりが癒されていきます。人は、苦しみや悲しみのときに青い空を見上げるのでしょうか。もしそうであるならば、それはひとつの祈りの形といえましょう。あるいは、喜びのときに青い空を望み見るのでしょうか。それもやはり祈りといえるでしょう。いずれにせよ、青い空は、常にそのように祈る人たちの心に寄り添ってくれます。何億光年のかなたの星よりもさらに遠い青い空は、私たちが目にするのできる唯一の永遠の姿でもありません。そこに私たちは無意識のうちに神を見ているのかもしれない。たとえ風雪の暗い日であっても、私たちの目を覆う雲の上には、いつも青い空が広がっていることも確かです。また、八月が廻ってきました。平和あるいはいのちのしるしである青い空に想いを馳せる時です。

(静岡大学名誉教授 農学博士)



「ピルの谷間のオアシス」

日善幼稚園では、毎年四つの同窓会が行われています。小学三年生が夏休みに。小学六年生が卒業式を終えた三月末に。二十歳になった子どもたちが一月の成人式前後に。そして六月第三日曜日の家族礼拝(父の目を覚えて在園児とその家族、教員合同の礼拝)に還暦を迎えた卒園生をお招きして礼拝を共に守り、「おめでと。これからもお元気で」とお祝いし、昼食をしながら同窓会をいたします。

日善幼稚園は、戦中戦後の十年間の休園はありましたが、今、創立九十六年目の歩みをしていきます。戦後再開し、その第一回の卒園生が六年前還暦を迎えました。故木下勇前理事長がお招きしてお祝いしました。在園児と礼拝を共にしては、「還」は元に戻る。また再びの意。六十歳を還年0歳としては如何でしょう。わたしは八十四歳ですから、還年二十四歳の青年です。夢を抱き、新たなスタートの時として、互いに励んで参りましょう」との発案で、名称を「還年の会」として始まり、今年は何回目。当時の先生がたもお招きし、横浜、広島からおいでくださいました。五十四年ぶりに名前を呼ばれて互いに涙し、病を得て生死をさまよった方は「生きていてよかったです。がんばります」と帰って行かれました。故人となられた方もいて、出席は十名たらずですが、現職の先生方にとっても励まされる時です。

小三、小六、成人の子どもの同窓会は、遠くに引越された方から「いつですか? 早く飛行機の切符を」とお母さん方が楽しみにしておられるほど。園に来て照れくさそうにしていた子どもたちも、一時もすると、大賑わい。まるで幼稚園児に戻ったように男女入り乱れて遊んでいます。一方お母さん方はゆったりと座り込み「やっぱりここに来るとほっとするね」と先生方も交えて互いの報告としては楽しんでます。在園時「日善幼稚園はほくの宝物」と言っていた子ども。学校でつらいことがあると、園に来て遊具で遊んで元気になる子どもたち。一杯のお茶と語らいて「また来ます」と明るくなつて帰るお母さん。「ピルの谷間のオアシス」と言っただけさつた方。

つながりにくい世の中にあつて、日善幼稚園に集う誰もが、園を通してつながりの輪を豊かにしていくといいな。その様な日善幼稚園でありたいと祈り願っています。

日善幼稚園 園長 岩切華代